第一分散会

座　長　及川一晋
副座長　古河良啓
運　営　佐藤妙晃・吉木祥介
記　録　坂輪宣政
オブザーバー　鈴木隆泰
参加者　九名

一、はじめに　運営側の事前の計画と実施

第一分散会は参加者九名と運営六名の計十五名で行われた。

今回の第一分散会では、参加者に自主的かつ自由に意見を述べてもらうことを重視した。そのために、あえて事前に資料を配布せず、自然に発言できる方向で運営を行った。

ただし、今回の研究会議では三名のパネラーの講演があり、それぞれが別の専門的視点にもとづくものであることを考慮して、受付の際に各参加者に「分散会ワークシート」を配布した。

ワークシートには各パネラーそれぞれの講演について「一、気が付いたこと」と「二、疑問に思ったこと」を記入してもらうことによって、参加者が要点を整理する一助となるように工夫したものである。これは一定の役割を果たせたようである。

会議では、池上萬奈・鵜飼秀徳・赤堀正明の各師のパネルに関して順に意見を募った。意見が出そろった後に自由

討議するという流れで運営を行った。その途中では時折、及川座長が参加者の発言に対して質問をした。また運営の鈴木隆泰師からは何度か論点を明確化する助言があり、二日目の途中ではインド仏教にかかわるミニ講演もあった。

実際の会議はおおむね計画通りに進められ、活発な発言があり多様な意見を拝聴することができたと思われる。

ここでは各参加者の意見を要約して報告する。

二、池上萬奈先生のパネル発表について

○パネルの内容、特に国際法などについて以下のような率直な感想があった。

・日本は軍事と経済のバランスが必要。国際的なソフトとハードの両パワーの感覚は一般人のそれとは異なる。

・経済など平等でないことも多い。ゼロサムゲームのようでもある。その中で日本や国民の地位を保つ努力も必要。

・内政不干渉、強制力の問題など参考になった。他国による傀儡国家も心配。

・社会をみるリテラシー、そのための情報収集が大事。金融などの背景も考えるべきだ。

・国際法やその国の法律を変えないと戦争はなくならない。

○またパネルの内容について、日蓮宗と創価学会のお題目の違いを池上先生は理解しているのだろうか、という疑問も出た。

○また次のような前の大戦と関連づけての考察、今後についての意見もあった。

今回のパネルでは、今の戦争や国際政治を如何に仏教とつなげてゆくか、という観点があまりなかった。ここは自分たちで汲み取ってゆくしかない。そのためには発信力が必要。今、私たちが問われている。

・僧侶として身近なところからはじめるしかない。

・被爆地や知覧特攻平和会館を見て戦争は悲惨そのものという感想だった。

・地元では今でも毎年、第二次大戦の慰霊法要を行っている。全日青でも毎年慰霊を行っている。
・能登の震災について、被災地は今でも焼け野原のような状態である。
・阪神震災の復興に苦労した、戦争は被災だけでも大変なものである。
・座長からは、能登震災は現場へ行ってみないとわからない部分があった。迷惑になるかと危惧するのもわかるが是非行ってほしい、という話があった。
・不惜身命の寄せ書きのこと、日蓮主義の盛行など、戦争に宗教として利用された部分があった。不惜身命は国のためでなく法のためであるのに、前段の「但惜無上道」を抜いて世俗的・軍事的に用いられてしまった。
・『立正安国論』でも土地の教えが間違っていれば内乱外寇も起こる、とある。
・お題目は戦争中の救いになるのか。その際の色読、活きたお経はどのようなものであろうか。
・今のウクライナで仏法を説けるだろうか。常不軽菩薩のようにできるであろうか。
・どう仏教とつなげ、発信していけばよいのか。ガンジー、賢王などの例もある。発信を受け止めてもらえる環境も必要か。

○インドの仏教における争いについての質問があり、それに答える形で運営の鈴木隆泰師の解説があった。
・原始経典には争いについての記述は少ない。インドの出家者は彼らだけのコミュニティのような形をとっており内部には節度やルールがある。

○戦争ではないが人間間にも争いがあるということについても様々な意見が出た。
・塾講師としての経験から、争いや対立は人間関係においてはどんな場面でも現れる。一方のみの意見を採用せず、対立を拡大させず両者に成長を促す対処が有効であろう。国同士の争いも学級内の様相と似ている。一方があたかも正統であるかのような雰囲気をまとうことに乗せられないように。

・言い分の通ることが正統性であろうか。
・やはり教育が重要だ。一定のラインを超えないようにする、それが教育であり仏教の役割でもある。

三、鵜飼秀徳先生のパネル発表について

○様々な直接の感想があった。
・歴史は繰り返す。前の過ちをよくみるべき。
・戦争はそもそもおこさせないのが大事。始まってしまえば別の要素が出てくる。
・社会の変化に伴って宗派のあり方も変化してゆく。これは今後も同様であろう。
・従軍僧の活動や、人を殺す武器としての戦闘機の献納には驚いた。
・真宗は神仏分離や戦争への対応も上手でよく順応していた。
・先生の話で、現在のゼミの学生に挙手させた、という部分には疑問がある。
・宗派の違いがあるからか、鵜飼先生とは生命に対する捉え方が違う、距離を感じる。
・個人を超えた集団の感情、特に恨みにも目を向けるべきだ。
○自分の身に置き換えてみたらどうであろうか、という意見もあった。
・以前随身をしていた老僧から従軍の話を聞いたが、自分も戦争にいけるのか、と自問した。
・その戦争が何のためか、家族を守るなどの理由によっても違うと思う。
・僧籍を剥奪された人、あるいは僧をやめるといって出征した人、誰もが悩みが多かったであろう。
・戦争にいった人は自分を犠牲にして国を守ろうとしたところがあり、敬意をもち下にみるべきではない。社会の変化は宗門の変化でもある。

○戦前・戦中の仏教について顧みる意見、それに関連する意見があった。

・戦時中は大政翼賛会に統一され議論もできなかった。議論をつづけてゆける社会環境は大切だ。反対の意見も受け入れつつ、社会の中で法華経を重いものにしてゆきたい。

・戦前の宗教団体は文部省の強い管轄下にあり戦後とは異なる。戦争協力は必ずしも自発的でない場合もあり檀家からの目も気になっていたであろう。

○そもそも歴史的に仏教も戦争と関わりは深いという意見も出た。

・妙成寺三光堂での加賀藩の戦勝祈願武運長久を願う法要があった。戦争への関与・正統性の付与の実例でもある。

・時代を問わず戦後の供養にも関わっていて、戦争前、戦争後のいずれも大義名分を担保する役割にもなっていたのではないか。

・宗教と戦争の関わりは長く深い。

・戦争の正統性の付与の役割もあった。

・僧兵や一向一揆は信仰があった、宗教の裏付けがあったから強かった面がある。

○安楽行品についても議論が及んだ。

・同品には権力者への不親近がある。これは戦争に加担しないことに通ずる。

○鈴木隆泰師から、インドの仏教は基本的に出家者であり、国政にはノータッチであり国や国主に近づきすぎないようになっている、と解説があった。

・日蓮聖人が幕府から土地を受けずに隠棲したのも不親近か。

・安国論を受け入れてもらえないなら国に関わらない、という意思表示ではなかったのか。

・近世では僧侶が権力の一部となり純粋に不親近ではなかったのではないか。

○廃仏毀釈についても意見が出た。

・日本寺の檀林が今でもあったならどうであったろう。

・新政府にとっての廃仏毀釈のメリットは何だったのか。

それに対し皇国概念と中央集権制の確立、宗教外の神道に依拠する国家の形成、寺領の没収など、などではないかという意見があった。

皇道仏教の話も出たが浄土教における天皇の位置づけはどうだったのか、という質問があり、真俗二諦からの阿弥陀仏・天皇の一体視という独特の発想があったという鈴木隆泰師の答えもあった。

四、赤堀所長のパネル発表について

○まずコスモス戦争について様々な感想があった。

・コスモスは難しい概念だった。仮想戦争の概念が難しかった。元のコスモスの定義についてもう少し解説がほしかった。コスモスの話の中で聖戦にも二通りあるとあったが、もう少し詳しく知りたい。

・正当な理由がある、と感じているだけでもコスモス戦争といえるのではないか。

・コスモス戦争の定義、どう見ていくかについても様々な意見が出て、定義だけではとらえきれない部分についても議論があった。聖戦と正戦の境界についても同様な議論があった。

・コスモスの対語としてのカオス、秩序のない争いはあるのか。コスモスという言葉が秩序をあらわしているならば、逆にカオス戦争というものもあるのだろうか。大義名分や争う理由のない戦争もあるのではないか。子供にも物の取り合いなど争いはある。個人と全体、捉える視点からも見方がことなってくる。

・秩序や体制もコスモスといえるのではないか。心がカオスという戦争は考えにくい。

・日本は自由も権利も保証されている、それが逆にカオスに近く、独裁・自由でない状況がコスモスに近いようにも思える。

○個人の意見と全体主義のどちらがコスモスか、という問いもあり、コスモス戦争の定義というのは戦争を行う際に正当な理由や事前軍備をしっかり整えた状態をいうのではないか、独裁者や普通の戦争はコスモスではない、という意見もでた。

・大義名分のない戦争は存在するのだろうか。必ず大義名分があって、自分の信じる世界観があって戦争になるのではないか。小さな子供でも物の取り合いなど理由がある。

・宗教に結びついた観念が戦争の大義名分となることもある。

・宗教的理由を後ろ盾にすべく宗教の引用をいいとこ取りして戦争を行う、それが聖戦の定義ではないか。

・仏教も政治的理由や背景のもとに戦争の根拠とされてきた歴史がある。戦争遂行の正当化のために使われてしまった部分もある。

・各宗教がそれぞれの特定の秩序体系をもつ、それがぶつかった時におこる戦争もある。

・そのような思想体系な理由付けに力点をおきすぎるのも如何だろうか。

・戦争は結局利害関係から起こる。実利を求めて争うのもよくある。実利から距離を置いた中立的な立ち位置があるといい。

・科学技術が進展しても暴走しないためにも宗教や哲学は必要だ。

○戦争、争いをどう見るかについても意見があった。

・戦争はパネルのように必ずしも争いだけを原因としているわけではない。

・戦争でない戦争はあるのか。

・冷戦や経済戦争のように戦闘がなくても実質的に戦争状態というのは平和といえるのか。湾岸戦争時の日本のように資金を出すだけでも戦争に参加しているともいえる。
・主義主張の争いも戦争といえるかもしれない。中傷のような攻撃もコスモス戦争といえるかもしれない。
・ガンジーの非武装デモ（非暴力によるデモ行進）も争いといえるのか。
・古今東西、戦争は宗教を含む精神的背景を利用している。十字軍などはわかりやすい例。各宗教の特定の秩序体系同士がぶつかり合う時が典型的なコスモス戦争。だが実際には典型的でない方が多いのではないか。
・始まった戦争を宗教が止められるかは疑問。思想同士のぶつかり合いになればどちらかが消えるまでやまないのではないか。
・スポーツのようにルールがあって勝敗優劣が明確になる、それに感情が湧く、これも争いといえるのか。スポーツマンシップに則った戦勝祈願なども身近なところからの安全や利得を求める欲もある。強すぎる欲は煩悩というべき。一定のラインを超えさせないように制御するところに仏教の役割があるかもしれない。欲望は人間の本性であるが、仏教では人は欲望を制御でき、それを通じて戦争を抑制することができる。
・欲望の充足や相手を叩きのめす優越を求めるのが幸福というものではない。
・互いの生存を脅かすような争いにならない努力が必要である。
・戦争の上手な終わらせ方を考えてみたらどうだろうか。
・自他すべての戦没者供養を続けるべきだ。
・自分の心を制御して戦争制御という大きなところへ結びつけたい。
・一人一人の信仰と行動が重要となる。
・対等な議論の場が必要だ。

・人間という存在があれば十界互具があり、対立や争いそのものはなくならない。
・法華経にもとづく幸福や平和の定義づけができるのではないか。
・争いの中でも、自分が蓮華の花のようになれるのか、他人に優しい言動ができるのか。

○日本の現状や歴史的分析の意見もあった。日本の第二次大戦はコスモス戦争に該当するかどうかが話題となり賛否の両論が出た。

・国体の護持とは何だったのか、どこに戦争の目的や着地点があったのか、といった検証も有効であろう。大戦後も天皇は残ったが財閥は解体された。
・日本でも大抵の時代で戦争が続いていた。その遺伝子もある。ただし遺伝子は同じでも後天的な教育が異なるので、今は異なる。今まで戦争が常にあったとしても変化は可能ではないか。刀狩りの頃から良くも悪くも武器を用いることへの意識が薄れている気もする。
・生物である以上、差は出るし生存競争もある。弱肉強食の世界だし人間にも教育テストなど様々な争いとみなせるものがある。日本の教育方針には優劣を競わせる要素が多い。
・今の日本人は教育、経済的余裕の影響もあるのか、それほどヒートアップしない。
・今の日本の倫理観は世界的には安定していて平和ともいってよい。
・今の世代は過去の大戦とは遠く隔たっているが、それを続けられるのか。
・国内の経済的争いはある、格差社会もその結果。
・本能と欲の世界がある。欲の強いのが煩悩　煩悩をもちすぎるのは危険。
・非核三原則の変化に心が波打っている。

○戦争をへらすためには教育が重要であるという意見が随所で出てきた。

五、ミニ講演と自由討議

○分散会では参加者の理解を深めるためもあって、鈴木隆泰上人による原始仏教に関するミニ講演を行い参加者に議論を促した。内容を以下に要約する。

もともと釈尊の教えは人間の三大欲求をも制御するものである。欲望を滅する、とはゼロにするのではなくコントロール・制御するという意味。悪い欲は滅し良い欲は顕現させていく。インドの出家者は社会活動や生産活動には一切かかわらない存在であり生殖の欲からも離れた存在。性行為は次の世代を生み出す生産活動になってくるから関わらない。ただし出家者はその存在する社会の要請に応じた求められる理想像を体現しようとするものであり、インドと日本ではその理想像が異なる。人には悟りたいとか他人を救いたいという欲望がある。それは良い方の制御された欲。全ての欲望をなくして枯れ木のように生きるのが宗教というわけではない。

出家者はその社会における出家者はこうあってほしい、という姿を体現するもの。

日本では結婚して跡継ぎを儲けて檀家のお墓を守ってくださいと求める雰囲気がある、だから結婚できる。そういった在家者からの理想像を体現する出家者の役割もある。全ての人が出家者となることは釈尊も望んでおられない、人間の三大欲求を完全に抑え込む存在なので一部の人間のみである。

宗教はレリージョンつまり、「レ＝再び」と「リージョン＝結びつける」の意。人間と神の一体だった地点へ戻してゆく、そういった意味である。宗教と科学は正反対の面がある。科学はHOW、宗教はWHYである。例えば人はどうして生まれてきたのか、という問いに対して、精子卵子などの仕組みを教えてくれるのが科学、自分の生まれて

きた意味に答えてくれるのが宗教。科学と宗教は仕組みと意味。仏教の役割は宗教として、人はどうして苦しむのかに答える。人には無明という根源的身勝手さがある。自分にとって都合の良いものはどこまでも求める反面、都合の悪いものはなかったことにしたがる。人間にとって一番大切な物は命。だが普段の私たちは生きていて嬉しい、ありがたい、とはあまり感じない。当たり前のようになっている。それが失われそうなときになってうろたえてしまう。一番大切なものをすでに持っているのに、それに感謝できず、金や名誉や権力などを求めてしまう。なぜかというと無明があって、生きているのが当たり前だとする自分を作ってしまう。そうする力をサンスカーラという。本当の自分は死ぬべき自分と思わず生きていて当たり前の自分を作ってしまい、それを本当の自分と思ってしまう。そして本当の自分と作られた自分のギャップを苦としてしまう。このことを縁起という。そういう意味を教えてくれるのが仏教。あるときは地獄の中にいるような自分もつくれるし、あるときは菩薩のような自分もつくれる。それを後に天台大師が十界互具としてまとめた。元々はそのサンスカーラが一定していない。諸行無常は全てのものが移り変わるという意味はなくて、今の自分を形成しているスタンスから一定していない、の意味。一定していないから地獄に落ちる自分にもなれるが、菩薩である自分も作れるし、最終的には仏陀にもなれる。一定させていくのが修行である。

○自由討議では様々な分野に話しが及び、宗門の教育についても意見が交わされた。戒律、教育制度、諫暁、ＳＮＳなどについても意見交換があった。

そもそも日蓮宗では戒律が未だに明確でないのではないか。度牒の際にどこまで自覚して受戒しているか、どのような戒か、曖昧な部分がある。得度式では是真仏子という経文が出るが、得度や信行道場でもどこまで自覚できているのだろうか。坊さんになった、というだけではいけない。これは今の宗門の教育制度の問題点でもある。また宗門の教育を考えると、他宗の多くが統一研究所体制をとっているのと異なり、宗門では勧学院、大学、研究所などの各教育機関がそれぞれ独自に活動する傾向が強く、連携が十分でない点が懸念される。すりあわせて統一されたカリキ

ュラムがないために、「どこで何をどう伝えるのか」がはっきりしていない。話し合いが必要ではないだろうか。例えば信行道場ではその時の主任先生の意向でカリキュラムが決定されている。布教研修所も半年あるが同様である。大きな目で分担していく形ではない。布教研修所は今の制度を変えて一年に延長するならば、かつての檀林のように日常生活を共にしながら修行するサンガのようにもなり、良い教育になるのではないか。年齢制限撤廃も希望すべきである等々の意見があった。

また、師匠制度についても、親が師匠になる、ということ自体が仏教では原則的でない。二重師僧制度、つまり最初の師僧は親でも二十歳になったら改めて師僧を選ぶ制度は如何であろうか、という意見、関連して、正宗の教育制度はとにかく統一性が強く強固だという意見もあった。

大聖人は個人の心の平安だけでなく国全体の平和をも説かれていることにも留意すべきであろうという発言もあった。争いが人の本性だとしても、それを発現させないのが仏教である。戦争をおこさせない、根絶することも可能であろう。浄仏国土、自分・国土を浄化し環境を変えることができるはずである。為政者を諫暁することは、現代ならば主権を持つ国民を諫暁することに通ずるのではないか、という意見も出た。

日本では公教育における宗教の存在が希薄すぎる。せめて文化的な方向からでもよいからもっと教えてほしい、という発言があった。それに対し現場の教師の素養が足りないことも問題であるという意見も出た。

ＳＮＳをもっと活用すべきであった、これからでも実行すべきである、という意見があり、他宗の実例や今後の運用についての意見交換があった。

○座長からは最後にお礼と今後についての発言があった。

今回は傾聴を大事にしたいと考えて運営を行った。傾聴する姿勢はとても大事である。傾聴することは促しにもなり、新しい空間を作っていくことにもなる。参加者はお客さんのように来るのではなく、この場を作っていくべき存

在である。そして、皆様も各ブロックへ戻って、そこで運営に回っていくのであるから、今日の雰囲気を感じ、各自の場所でこれから務めを果たしていくのだと思っていただきたい。

六、まとめとして

今回の分散会は、参加者の皆様から積極的な発言、意見交換をしてもらったので、かなり熱量のある討議となったと思われる。パネラーの発表への直接の感想・意見のみでなく、そこから広がりをみせて幅のある内容になり、参加者全員にとって有益な機会となった。連日のように悲惨な戦争のニュースがある昨今であるが、今回の中央教研、分散会は、私たちが日蓮宗僧侶として戦争と平和をあらためて考え行動してゆくことに寄与するものになったのではなかろうか。

第二分散会

座　長　灘上智生
副座長　中村龍央
運　営　菊岡妙光
記　録　中村宣悠
参加者　十三名

一、運営について

第二分散会では、一日目は、パネル発表・ディスカッションを踏まえ、参加者の親類等における戦争経験を順に聞いた。次に、現在の日本において我々が徴兵された場合どうするか。また、戦争にならないためにどうすれば良いか意見を出し合った。二日目は、一日目の意見を基に、そもそも平和とは何であるのか。平和のために、我々は具体的に何が出来るのかを議論した。

二、分散会討議

〈一日目前半〉

参加者の親類等における戦争経験や各自の思いについて意見を聞いた。大別すると次の通りである。

○戦争被害について

・被害がなく実感が湧かない。

・自坊にも被災の記録がある。

・親族の身体に残る怪我の痕から戦争の恐ろしさや名残を感じ取れた。

○戦時中における反戦意識についてどのように聞いたか

・当時から戦争に行くことに葛藤があった。

・鵜飼先生の発表の中で梵鐘を供出した話があったが、反感もあった。しかし、政府に反抗すれば僧籍剥奪や市民権剥奪のリスクがあった。

・反対運動によって供出を免れた例もある。

・戦争協力を拒否すれば嫌がらせを受けた。

・同調圧力から、戦争に行かざるを得なかった。

○戦争の悲惨さを伝える事の重要性

・当時の記憶を伝えていくことが大切に思う。

・自坊に砲弾が祀られている経緯が失われつつある。

・戦争経験者からもっと話を聞いていればよかった。

・経験者は悲惨な記憶を話したくなかったのかも知れない。

・戦争を知らない世代が増えていく中で、恐ろしさや悲惨さを次の世代に残さなければならない。知る世代と知ら

ない世代で、共に平和を考えることが大切である。

○僧侶としてできること

・仮に戦地に行くとしても僧侶らしい振る舞いがあるのではないか。
・慰霊行脚をしている。平和を祈る。平和運動をする。
・僧籍を剥奪されたとしても宗教活動を続ける。
・法華経の教えを広めることが大事である。

○戦争が起こってしまったら・起こさないために

・パネル発表における池上先生の指摘の通り、仮に戦争が起こってしまったならば、ルールを守らなければならない。特に市民を攻撃しないなど。
・ソフトパワー、魅力的な国にすることで戦争を回避できればと思う。

〈一日目後半〉

現代において徴兵制が布かれ戦争当事者となった場合、どのように振る舞うか各自の考えを示した。

始めに、経済制裁や侵略によって、自衛の為に否応なしに戦争に巻き込まれる例が示された。その場合でも戦争協力を拒否すれば様々なリスクが想定される。このようなリスクを前提条件とした。

その結果、それでも参加しないという意見と、消極的に仕方なく参加するという意見に分かれた。

○戦争には絶対に参加しないと述べた参加者

・何故人を殺してはいけないのか。自分がされて嫌な事はしないというシンプルな考えがあれば抑止力になる。

・社会的地位の剝奪などリスクがあれば戦争に行かざるを得なくなるかもしれない。それでも殺生はしたくない。

・反対派を集めてストライキなどの活動をする。僧侶なので殺さない。それでも戦地にいくことになれば自衛だけにつとめる。

・僧侶として戦争協力はできない。還俗しなければならない。

・強制的であれば、極論であるが自決をする。

○消極的に仕方なく参加すると述べた参加者

・リスクを考えれば拒否出来ないと思う。そういう状況（第二次世界大戦のような）にはならないと考える。

・袈裟をつける者が行くべきではない。殺すことはしたくない。戦場でも法を説くことができる。身は従うが心は従わない。

・戦争状態になった場合、行かないとは言いきれない。消防団の講習会で有事訓練がある。過疎地域でお年寄りも多く、周りの手助けをしたい。

・自分のコミュニティを守るために行くかもしれない。反対運動があれば手を取りたい。

・ビジネスの為の戦争には行きたくないが、日本を滅ぼすための侵略ならば戦う。情報を精査し判断したい。

・同調圧力によって行くことになると思う。コロナ禍でも同調圧力があった。当時は密告などもあった。

以上の様に、戦争に行くならば自決をするという極論も出たが、宗教者としての自決の是非も問われた。これに対

し、ベトナム戦争時に反戦を訴えるため僧侶が焼身自殺をした例が示された。自決は最後の手段であり良い事ではないが、社会に対する意思表示として意味はあるという。

また、戦争は自衛の為と言っても侵略行為があり、自衛の為に攻め込む場合もある。

外国人留学生などを通して外国とパイプを作り、他国の有力者に対して影響力を持つ事の重要性が示された。

また、ボスニア戦争の際、内政不干渉の原則から手を差し伸べられず、多くの民が苦しんだ経験がある。今は内政不干渉の価値観を見直す必要があるという意見が出た。

それぞれの価値観や意見を聞いた上で、そもそも平和とは何であるのか。平和のために具体的に何が出来るのか。各自で考える事を課題として一日目の分散会は閉じられた。

〈二日目〉

始めに、平和教育の経験を参加者から聞いた。

○平和教育がなかった参加者

・〈千葉県〉歴史として紹介された程度だった。

・〈岐阜県〉祖父から広島にいて原爆の被害にあった話などを聞いた。自坊で祖父が平和教育をしていたが、学校からの依頼かは定かでない。

・〈千葉県〉読み聞かせなどで聞いたくらい。

・〈京都府〉京都は部落差別問題があり、そういう授業の方が印象に残っている。

・〈北海道〉戦争資料館に行った際に被害を知った程度である。爆弾の被害など少なかった。戦禍のあった地域に比べて温度差がある。

○平和教育があった参加者

・〈福岡県〉夏休みの八月六日か九日に原爆に関する平和教育があった。原爆の被害について力を入れていた。写真やビデオなどを見た。

・〈熊本県〉修学旅行は長崎だった。平和について考えるという機会はあった。夏休み中に学校に行き黙祷することもあった。戦争時代の話である『ちいちゃんのかげおくり』などで当時の被害状況を知る機会があった。『火垂るの墓』を学校でみた。

・〈神奈川県〉空襲があった地域であり、学校で平和教育があった。資料館があり、悲惨な歴史に触れて怖いと思った。低学年の頃、戦争について調べる機会があった。

・〈富山県〉道徳の授業で受けた。課外活動でインタビューなどをした。修学旅行で被害者の体験を聞いた。

・〈山梨県〉平和教育が多い世代であり、日教組の影響が強かった。10歳未満の子供に対し、戦争が起きた理由や、ABCD包囲網（アメリカ・イギリス・中国・オランダによる日本への経済制裁）などの説明を受けた。その教師は日教組ではなく保守的であったが、戦争には反対していた。

以上の様に、平和教育の実施には地域差があることが分かった。特に戦禍の酷かった地域が平和教育に力を入れている傾向にあった。

これを受け、各自に平和の概念を言語化して貰った。主な意見は次の通りである。

○衣食住が充実している

・食が足りている事が大事。

・日本も間接的に戦争状態にあると思う。ロシアとは直接的な戦争はしていないが、間接的に物価高などの影響が

ある。生活が苦しい人もおり、平和とはいえない。全世界が平等に衣食住に困らない事が平和に繋がる。

○心が平穏な状態である

・心や生活が平穏な状態であること。

・戦争が無いからといって平和とはいえない。日本にも～ハラスメントなどあり、人を切り捨てることもある。心や生活の豊かさが平和である。

・全人類の心が豊かになれば争いが起こらないのではないか。衣食住があっても人を傷つける者もいる。心の豊かさが平和である。

○他者と公平で尊重し合える

・他者を尊重し認め合える。助け合える。

・公平、公正、フェアトレードなど。国によっては正当な対価を得られていない場合がある。対等な関係が理想である。

・妻を揶揄されたウィルスミスが司会者を殴打をした事件があったが、アメリカでは攻撃者だけが批判をされた。日本では、殴られた側の落ち度も批判されており、感覚の違いに驚いた。フェアな関係が平和である。

・法学で松川裁判を学んだ。三人死亡した事件で日本共産党員が犯人とされたが最高裁で無罪判決がでた。判決後も共産党員に対する批判的な意見は根強かったが、擁護する声もあった。その者は共産党の考えには全く共感できなかったが、それでも擁護をした。異なるイデオロギーでも尊重できることが大事である。

○平和の概念は変化する

・民族や地域によって概念が変わる。戦争を続けている国と日本では平和の意味が異なる。戦争があっての平和か平和があっての戦争か。ピースは一欠片の平和という意味である。

・中台関係の悪化が報道されているが、過去に四年間住んでいた地域は平和そのものであった。今振り返れば水面下では様々な事が起こっており、平和ではなかったのかもしれない。

以上の様に、衣食住に困らない事・心や生活が平穏である事・他者と対等な関係で認め合える事が平和であるとする意見があり、地域や価値観によって平和の概念は変わるという例も示された。

次に、平和のために僧侶として具体的に何が出来るのかを各自に述べて貰った。

○コミュニティを構築する

・寺院をコミュニティの場とする。そういう場を作ってお互いを知り、尊重し合う。各寺院で行えば全国に波及できるのではないか。

・寺院で葬儀をする。かつては檀家や町内の人が集まり一つのコミュニティが出来ていた。間口を広げ何時でも誰でも寄れる寺院を作りたい。

・縁日などをする。池上本門寺のお会式の様な、人が大勢あつまる環境を作りたい。

・寺院の敷居をさげすぎるのは良くない。楽しい事だけするのではなく、厳しい修行の面を見せることで記憶にも残る。縁日は賑やかでも本堂は厳かであるべき。

・僧侶としてボランティアに参加する。

・縁日や御首題帳を通してコミュニティの場を作り、僧侶としての話を聞いて貰う。
・自坊を災害時の一時避難場所にする。
・法事や葬儀は檀信徒以外の人も来るので、施主だけでなく色々な人とコミュニケーションを積極的にとる。
・消防団で繋がりを築くと檀家以外とも話ができる。
・政治家と関係を構築する。経済基盤のある者が政治家になる傾向があり、その様な人物が若い頃から寺院に接するようにする。パイプを作り、国に対する影響力を持てるようにする。
・政教分離によって発言しづらくなったが、政治や国のあり方を論ずることが必要である。

○平和について 考える、伝える、対話をする

・平和のために何ができるか考え、伝え続ける事が大事である。死に直面した人と接するなかで、仏様の教えを頂いた僧侶が伝えなければならない。
・平和について、次世代を担う子供に伝える。地元の小学生に、本堂などを案内しながら、自分の父母や祖父母達が命を繋いできた結果、今の自分たちがいることを伝えた。
・僧侶が平和とは何かを考える場を作る。価値観を共有し、皆で考えていく事が平和に繋がる。対話することにより固定観念が変わる。
・対立していると一方を悪と決めつけてしまうが、調べてみると様々な事情や立場、考え方に気がつく。嫌われ者にも良い面があり、どちらも尊重しなければならない。歩み寄りが大切である事を伝える。
・平和とはマクロ的な社会状態をさす。ミクロを積み重ねていく事が、我々の出来る範囲である。

以上の様に、コミュニティを構築し、檀信徒や、地域社会、国家に対して対話をする機会を作るという意見、そして、常に平和を考え、伝えるために対話を続けるという意見がでた。これらの意見は密接に繋がっていると考えられる。

三、おわりに

第二分散会では活発に意見を出し合い、次のことを確認できた。

戦時中においても反戦意識はあったが、同調圧力や様々なリスクによって、戦争に協力せざるを得なかった面があった。現代においても僧侶として決して戦争に参加しないという意見もあれば、リスクがあれば参加せざるを得ないとする意見もあった。

また、平和教育には地域差があることが分かった。戦争の悲惨さや平和の尊さを後世に伝えることが肝要である。平和とは衣食住の充実や、心の豊かさであり、他者と対等に手を取り合える事である。また、その価値観は一定ではない。

平和を実現し維持するためには、コミュニティを構築し、互いに尊重し合い、対話を通して檀信徒・地域・社会・国家に対して、法華経の教え、平和の尊さや戦争の悲惨さを伝えていく事が課題となる。

第三分散会

座　長　加藤彰晃
副座長　齋藤宣裕
運　営　横山正見
記　録　髙野光拡
オブザーバー　間宮啓壬
参加者　九名

一、運営について

パネルディスカッションを踏まえ、一日目は二時間一五分、二日目は二時間半に渡って討議が行われた。座長挨拶において、自己紹介を兼ねた「戦争に関する見聞きした話」をまず共有し、その後、パネルディスカッションの感想等を述べ合うことが提案された。第三分散会は今回最も少人数の割り振りで、小さな会議室を使用したこともあり、距離感が近く発言しやすい雰囲気を作りやすかった。

二、グループ討議（一日目）

〈自己紹介・身近な戦争に関する話題〉

・七三一部隊（満州の人体実験・細菌兵器の研究をしていた研究部隊）の石井中将の出身の地域に住んでいる。かつては街なかに傷痍軍人がいたのを記憶している。

・一九四五年八月十四日の夜から、日本で最後に空襲を受けた場所。二百数十名が犠牲になった。「一日早く戦争が終わっていれば」という嘆きの話を聞くことがあった。
・空襲や長崎の原爆に関する小さいころからの教育を思い出す。僧侶となってからは慰霊行脚にも携わっている。
・沖縄では戦争の爪痕などは身近に感じてきた。沖縄では差別の歴史があり、どうにか自分たちが日本人として認められようと戦争に協力し、その結果悲惨な結果を生んできた。差別をなくしていくことが大切だと思う。寛容の精神がないとなかなか戦争は止められない。中村元先生が「仏教は武力ではなく、説得によって広まった唯一の宗教」であると述べられていたのを思い出す。
・昨年一〇二歳で亡くなった筆頭総代が、シベリア抑留経験者であった。遺族会での挨拶を聞いた時、心の傷の深さを感じた。
・間違ったことは検証して訂正していくことが大切だと思う。特攻帰りの方と話した時「一回死んでいるから、生きてりゃなんでも楽しい」と言っていたのを記憶している。
・平成二十八～三十年、大連へ行く機会があった。日露戦争の激戦地に実際におもむき、話をきいた。現地に行くことで経験できること、感じられるものがある。想いを持って、伝えることができれば。
・戦時中は当時の住職が戦地にいった。足を撃ち抜かれて離脱したが、部隊はその後全滅。その方々の慰霊はずっとしている。
・八月九日、必ず登校日があり戦争に関する教育がされていた。いま奈良の小学校ではやっていない様子。広島への修学旅行でも、原爆ドームには行っても、そこに対する時間や熱意は減っているのかもしれない。
・人が殺し合いをすることの本当の「怖さ」というものを伝えていくことが大切なのでは。どのように伝えていったらよいのか。戦争に対する想像、自分に向いたときにどう感じるのかを考えていかないと。

・母方の祖父が戦争に行った。もともと在家で、戦線離脱したあと、お坊さんに命を助けられた恩返しで出家した。戦争に関わった御縁によって今自分がいることを、ご回向をしながら感じる。韓国の友達がいて、もし戦争になったらミサイルを打ち合うのか。そういったことを想像したことはある。

・祖父が特攻隊の指導員だった。両親が別れの挨拶をしていよいよというところで終戦。若い人が飛び立ち命を散らすことは「地獄」であったと語っていた。残っている人の話を聞くことが大事だと思う。全日青では毒蝮三太夫さんの空襲体験をインタビューし、YouTubeに残している。

・小学生のころ「はだしのゲン」を見て衝撃を受けた。自分たちと同じくらいの若い人が戦争で亡くなっていくことが、本当に国のためなんだろうか。ウクライナ・ロシア、イスラエル・パレスチナの戦争。戦争についての情報を集めていると、溢れすぎていてどれが本当の情報なのかわからなくなる。ネットリテラシーの大切さ。学びの大切さを感じる。

〈伝えること・教育について〉

・原爆の話　記念館がきれいになっている。伝えていく内容が柔かくなっているのでは。

・子どもが零戦などの造形美にハマっている。どんなに格好良くても、使い方を間違えたら人が死ぬからね、と伝えている。学校の先生にも極端な人がいる。銃や戦闘機＝戦争賛美とみる人も。物は使いようである。どう使うのかを間違えてはいけない。

・「物が欲しい」と思ってコントロールできないと喧嘩をしちゃうよ、と伝えているが、発達に合わせて、もっと深い話をしてあげたい。

・理想の教育。「競争をやめましょう」の教育について。

・争いや競争を見たときに興奮する、という人間の性質を考えたとき、覆い隠すのではなく、徐々に体験させるような何かが必要ではないか。「怖さ」は実感できるのか。
・リテラシーの教育も、皆で知恵をだして方法を考えていかないと。
・戦争を体験した人が、戦争を賛美する孫世代を叱ってくれた。
・死のポルノグラフィティ化。かつて湾岸戦争の映像は、テレビゲームのようだと言われていた。
・昔と今の差として、「戦争の映像に色がついている」ことに驚く。リアルな映像が見えてくる。昔は、話は聞いていても、映像ではない。いま受け取る情報は、活かしていくという考えも一つの大きなテーマではないか。
・大連の工場のご祈祷でついていった。最初は慰霊目的というわけではなかったが、それぞれの思いで慰霊をしようということになった。息子を知覧に連れて行ったことがあるが、大学での勉強をするなかで、「あのとき連れて行ってくれてありがとう」と言ってくれた。現場に行っていたことが大きかった。実際に目で見ることが大切であると改めて思う。

〈「平和教育」の地域差〉

かつて自分が受けてきた学校での夏休みの平和教育があったか否か。あるいは今の夏休みの平和教育に違いがあるか、地域差があるだろうか、というところで意見を募った。

・〈宮城県〉集会等学校では平和教育は「なかった」。図書館や日本史で教わる程度。
・〈岡山県〉夏休みにはかつて「あった」。いまの小学生は「ない」。
・〈大阪府〉あまり記憶にない。はだしのゲンの印象が強い。
経木塔婆を立てて祀る対象から戦死者が消えてきている。

・〈奈良県〉かつては「あった」が、いまはそういう話を聞かない。
・〈神奈川県〉学校全体としては「なかった」。
・〈沖縄県〉非常に盛ん。六月の慰霊の日が近づくと特にそう感じる。ひめゆりの話など、当事者が減っていく中、それ以外の人が語るのをどう工夫していくべきなのか。聞く方の想像力を高めていく工夫も必要ではないか。
・〈長崎県〉昔も、今も夏休みの平和集会・平和教育は行われている。被爆地としての県の方針もあるかもしれない。
・〈福井県〉若い頃、覚えている範囲では「なかった」。かわりに部落解放運動が強かった。実体験の差か、温度差もある。もっと「ちゃんと伝わる」工夫をした方が良いように思う。
・〈長野県〉自身の学校の授業で「家族から聞いてきなさい」があった。子どもたちの小学生時代にはなかった。
・〈静岡県〉昔は同胞無線というものがあり、役場から各家庭に無線が飛んでいた。両原爆の日、終戦の日、その時間に黙祷の時間があった。また、戦争体験を話されていた。郷土史の時間に平和教育はあった。
・〈富山県〉小学校のころ（五～六十年前）は「戦争体験を聞いてくる」という宿題が出ることがあった。いまはよくわからない。映像で見ることの大切さを感じる。
・〈秋田県〉平和教育はあまり記憶にない。日本史の授業が明治頃で終わり、近代のことをあまりやらないのは問題だと思う。教育に関して先回りし過ぎの傾向があるのでは。
・〈千葉県〉七三一部隊には箝口令が敷かれていたため、街自体、戦争体験を語ることがタブー視されていたかもしれない。

〈戦争の原因について〉

アインシュタインとフロイトの往復書簡にあるように、人間には破壊的な欲動があるという意見について、どう考

えるか。宗教が原因となるという意見についてもどう考えるか。

・本能だけで語れるのだろうか、と思う。民俗学や遺伝子学的な話もあったとして、理由付けに、宗教をもってきているだけではないか。

・十界互具を考えたときに「修羅」がある。本能としてそれが存在するとして、「それだけ」で戦争が始まるのかどうかは疑問。

・社会学の視点からスポーツを見たとき、ラフプレーのときに興奮することが言われている。戦争、戦いの中の原因の一つに宗教がある、という情報の中にあってどう「宗教」を教えるのか。法華経を伝えるのも、包括主義の中で考えてよいのか。

・宗教のみが原因、ということは言えないのでは。原因というより、説明に「つきまとう」。宗教を原因にするという議論から離れていく努力も必要。

・曹洞宗では道元の名のもとに現代の問題の責任を語らない、「道元に責任を被せるようなことをするな」と言っている。戦争に関して、日蓮聖人の名を持ち出して、戦争賛美にもっていくことも、戦争反対にもっていくこともできる。現代に生きる我々が、自分たちの判断の責任を日蓮聖人に押し付けるような表現には注意が必要だと思う。

・「自分の頭で考えること」、地道な交渉が大切であろう。

・日蓮宗として、過去の戦争に対する反省は出されたのか。宗務総長名で出すことはないのか。過去のことに対してしっかり反省の意を表明することが平和への出発地点になるのでは。

・国の省庁が声明を出せば、国の意見となり「国の責任」となる。実際に外から見られたときに、否応なく「その責任」と見られることもあるのでは。「責任」は避けられない部分もある。だからこそ、個々人もしっかり学び、考えて、行動する必要がある。

三、グループ討議（二日目）

〈情報提供〉

前日の議論を踏まえ、まずいくつかの情報提供が行われた。

・パネリスト池上萬奈先生のお話にあった「騙されないように、情報を疑いながら考えていく」という話、赤堀所長の発表にあった仏教の「運命を絶対神に任せない」「差別をしない」「自業自得の原則」という特徴、前日意見が上がった「自分の判断に責任を持つ。（仏祖や宗祖に責任を押し付けない）」という三者の話は共通しているように見える。

・社会心理学の分野では「ミルグラムの服従実験（人は権力に盲目的に従ってしまう）」、「ジンバルドーの囚人実験（状況や役割次第で暴力的にも変化する）」、「アッシュの同調実験（少数派は多数派に同調して意見を変えてしまう）」などがある。これらの実験は大戦で起こったことを説明するものとして教科書にもよく載っているが、近年見直されてきている部分がある。例を上げれば、服従実験に反対し、中止した人たちがいたこと。「生徒役に話しかける」「自分の責任を思い出す」「徹底的に拒む」ことが鍵となった。

「自分ごとにすること、考えること、対話すること」これらが戦争を止めていく（平和を実現していく）鍵となるのではないか。

〈釈尊の話〉

・コーサラ国の波琉璃王が、釈迦族の国を滅亡させた戦いについて。

波琉璃王は幼少時に釈迦族から受けた辱めを恨みに思い、釈迦族の国に攻め入った。釈尊はこの侵略を二度は止め

たが、三度目は止めようとはされなかった。

ついに波琉璃王の侵攻によって、釈迦族は滅亡してしまう。釈迦族は軍備は整えていたが、釈尊の不殺生の教えを護って全滅した。その後間もなく波琉璃王とその軍隊も、雷に打たれて命を落とした。

釈迦族は高慢な思い上がりによって波琉璃王を辱めたことにより滅亡し、波琉璃王もまた釈迦族を滅亡させた因縁によって落命した。釈尊は「なした行為の　その報い　消え去ることなく　自らに帰る定めは　変えられない」と自業自得であることを教示された。

・ローヒニー川の水争い

釈迦族とコーリヤ族が、ローヒニー川の水利について争いを始めた。この争いを知った釈尊は両者の間に入って、水と人々の命、どちらがより価値あるものかを尋ねた。両者とも、命の尊いことに思い至り、争いをやめ、互いに協力して川の水を分け合って使うことになった。

・人に依ってしまったことが良くなかったのでは。環境や人に左右されるのではなく、法に依って判断していくのが大切。

〈いざ、戦争となったときにどうするか〉

・自分が行くかどうか、今は結論をだせない。

・強く「行きなさい」と言われたときに、強く拒めるかは自信がない

・選べるのであれば、争いのないところを選びたい。

・選択肢のない状況はイメージしにくい。

・赤紙が来たら断れない。ウクライナがいまその状態。拒否権がない。

・空気の醸成。行堂での体験を通して考えると、「空気」に乗らないようにするくらいしか、宗教家のできることはできないのでは。
・創価学会は資金や人的パワーがあるので、やれることも多いかもしれない。
・学会の資金と比べて、我が宗も、それぞれの寺院が持つ資金をかき集めれば地力はあるのではないか。
・立正平和運動は形骸化していないか。まず戦時中の戦争加担についての、宗門としての声明や区切りが必要だと思う。各地で行っている平和運動を、宗門として応援するなど、もっと力を入れてもいいのではないか。行動と言動が一致していないのが日蓮宗っぽくないと思う。
・間違ったことをすれば、大なり小なり責任を負うべき。
・戦争に行くかいかないかを考えるとき、「お坊さんとして」考える部分と、「個人として」考える部分とが食い違ってくる。家族を思うとき、侵略されて「どうぞ」と家族を差し出すなんてできない。「空気感」が醸成されてしまえば、行堂の話と同じように、抗えないのでは。そうならないため、「その前に」、活動していくのが大事。

〈軍事費増強についてどう思うか〉

・釈尊は「門を閉じよ」と言い、日蓮聖人は涅槃経の「刀剣・器杖を執持すべし」の文を引用した。
・いのちに合掌、を掲げながら人を殺めることができるのか。戦争が起こったときに、「日蓮宗として」反対する態度をとるべきではないか。個として、というより、宗門として。
・壁のない家は守れないが、例えば韓国人に知り合いがいるが、韓国にもいい人悪い人がいる。それも対話しないと知ることすら難しい。普段からの交流が大事。
・軍備増強する中で、考えておいて、意見を発信していくべきではないか。

・国際社会から見たら、軍備も核もカードの一つ。戦争の反省という意味では、宗教が煽ることもできるという危うさを自覚、認識しておかないといけないのでは。
・人が死ぬこと、殺すこと、そういったことを身近な感覚として想像することは、一つの命同士の交流から芽生えてくるのでは。
・国か、宗門か、個人かどの単位で考えるのかによって変わってくる。

〈個と宗門・どう判断していくか〉

・反省という意味で、日蓮聖人の言説をどう利用してしまったのか、資料として残し研究していくことには意味があるのでは。
・「いのちに合掌」は素晴らしい考え方だが、個別の事案は語られていない。例えば宗門の考え方として、核反対、賛成のような個別具体的な見解を出していくことにも是非があると思う。
・戦争反対や暴力反対はいい言葉だが、力がない。ではどうするの、という一歩踏み込んだところをどうするか。空気感ということを考えたとき、声明を出すなどして意見を固定化してしまうと、それを逆手に取られたり、まずい状況が起こるのではないか。
・信条として構えておくことと、先行して意見表明することは違う。過去の反省という面では積極的に出してもよいかとは思うが。
・核を持たない、というのは核被害国としては当然だと思う。非核三原則もある。一方で、核が国際政治のカードの一つというのもわかる。
・戦争について、考えること自体に意味があるように思う。声明としてだすかどうかはさておいて、意見として出せ

るように考えていくこと自体が重要。

・兵役拒否の話。状況によって、自分がどう判断するかなんてわからない。場の空気というのは本当に怖い。ウクライナはそういう状況。

・「兵役拒否」はお坊さんとして持って置かなければならない考えだろうか。

・どっちが正しい、を個人で選ぶのは限界がある。核の是非や、戦争に行くかどうかも、すべて、どちらもある。言葉にするのは難しいが。

・こんな宗門でいいんだろうか。いま宗門運動が止まっている状況。宗門人としての教育が不足している。

・教師に対して強い態度を取る宗門と、いまのような柔らかな宗門を比べるのであれば、今の形が自分は好き。他宗と比べても、ガチガチではなく、ある程度自由に動くことができることが、この宗門の「良さ」でもある。

・組織として、大きなものではないと「空気感」は作れない。宗門として、どれだけ作れるのか。日蓮宗が、自分をどれだけ守ってくれるかはわからない。何かあったときに、（戦争に反対した時でも）宗門は守ってくれる、という空気感がつくられるのが大事なのではないか。

・守ってもらえる、という感覚は大切。戦時中、軍部から大曼荼羅に難癖を付けられた「不敬問題」の例。過去の事実や物事を、どう捉えるかによって流れは変わってしまう。空気をつくらせないための反省が必要だと思う。

・それぞれの地元に帰ってから、この考えや葛藤を周りに伝えていくことも大事。

・どのように、具体的にその「空気感」を作らせないということができるだろうか。

・常不軽の二十四字、いのちに合掌、がすでに戦争反対の精神、空気感の基盤として広まっているのではと思う

・立正安国論には「正法を立てて国を安んじる」とある。言葉やスローガンと、教えとの整合性は考えていくべきでは。一人ひとりが自覚的に考えていくことが、空気を作っていく。

・あらゆる場面で仏性に対して手を合わせていくこと、が「いのちに合掌」だと思う
・宗門に対しても、管区に対しても、もっとモノを言っていったほうが良いのでは。議論を活発にしていったほうが良い。
・これから教師になる人に、何を伝えていくのか。葬儀や、霊魂や、衆生との向き合い方を、教育課程で教えていないのでは。
・信行道場で、ベースとして大事なことは基本としての芯を学ぶことだと思う。
・仏弟子であるということがベースにある。戦争と平和に関しても、そこから何ができるのかを考えていくべき。
・相手を知ること。相手が「宗教観に基づいて行動している」ことを念頭に、相手が「争いをしようと思わないような」振る舞いができたら。
・現代と、大聖人がいらっしゃった時代は違う、のが大前提。
・現代は、我々僧侶が抱えるものがあまりにも大きくなってしまったのでは。
・家族や伽藍、檀信徒など、大切なものを抱えている。そのなかで、判断していかないといけない。過去には過ちもあったとは思うが、先人の行ってきたことの上に立っているという視点。俗と聖と両面を大切にする視点で考えていかなければ。
・宮崎県の廃仏毀釈の話。空気、忖度、それらが恐い。一つ一つの行動の際に考えていく
・この僧侶はこのことを大切にしているんだな、と伝わるような活動を。
・空気感は一つ一つの行動で醸成される。この場所から熱を伝播させてもらえたら。

四、まとめ

一日目は各々が見聞きした戦争についてのお話と、それをどう次世代に伝えていくべきか、といったことについて焦点が当てられ、話がすすんでいった。その中で各地、各年代での平和教育の程度や有無についての意見交換があり、全国的にその程度が薄まっていること、戦争被害が大きかった地域ほど、いまもその教育が続けられていることがわかってきた。

二日目は様々な意見が飛び交いつつ、「空気感」についての考察がなされていった。宗門として、個人としてそれをどのように作っていくか。自分事として考え、対話の姿勢を忘れないこと。流されないために考え続けることが大事なのではないか、といった意見が出されていた。

当分散会では「空気感」が、重要なキーワードとして挙げられた。戦争へと向かう誤った空気感ができあがってしまえば、それに抗うことが難しいことも確認された。この空気感を醸成するのは、個々人の思い、考えである。それぞれの誤った思い、考えをただすには正しい思い（教え）による他はない。常に正しい教えに立ち戻って学び、それを伝え弘めていく以外に私たちの道はない。このことをもって、今回のまとめとしたい。

第四分散会

座　　長　　石原顕正
副 座 長　　松井大宗
運　　営　　小髙絢華
記　　録　　成田東吾・水谷進良
オブザーバー　　櫻井義秀
参 加 者　　十三名

一、運営について

本分散会は、運営を含め約二十名が参加した。運営側の課題としては、戦争や平和というデリケートな問題を扱うため、討議の焦点がどのように展開していくのか事前に判断しにくいことであったが、その場の状況から柔軟に対応できるような運営を心がけた。

二、問題提起、および講演を聞いての感想

はじめに座長より、大正大学星川啓慈先生の著作を引用した上で、次の問題提起がなされた。

これまでの人類の歴史を考えるといつの時代も戦争があった。記録に残っている五千五百年の内、世界でいかなる戦いもなかった時代はわずか二百九十二年しかない。それほど人類は戦争をし続けてきたのであり、現在でも世界各地で武力衝突が頻発している。

ところで四半世紀上前にもなるが、日本の雑誌に宗教が戦争・紛争の原因であるという論調の記事が盛んに掲載されると、その雑誌の売り上げが伸びると聞いた。なるほど、日本人はそのような考え方を好む傾向があるように思える。それを反映してか日本のインターネットでは、「ほとんどの戦争の原因は宗教なのでしょうか」「宗教があるから戦争は起こるのではないか」「宗教戦争の起こる原因は何か」ということが、盛んに語られるようになった。

本分散会ではそのことを含め、皆さんと考えていきたい。とても重いテーマであるが、是非忌憚のない意見を述べて頂きたい。

次いで、参加者の自己紹介と共に講演の感想を尋ねた。講演に関する主だった感想は次の通りである。

・月参りに行った際、檀家より「ウクライナ侵攻について、お上人はどのようなお考えをお持ちですか?」「どうしたらこの侵攻を止められるんですか?」と、試されるような質問をされたことがある。それに対し上手く答えられず、悔しい思いをした経験があったが、今回の講演はその答えの示唆となるものであった。

・講演で「戦争は人間の本性である」という話があった。例えば学校でのイジメなどもそれにあたると思われるが、人間の性として攻撃的な面はあるのかもしれない。理想論だけでなく現実的な問題として考えなければならない。

・仏教から戦争を考えるというテーマであったため楽しみにしていた。自分達が奉じる法華経と御題目をどう活かせば平和に繋がるのだろう、戦争を止められるのだろうと期待していた。しかし「仏教から」と銘打っているにも関わらず、キリスト教やイスラム教、カントの話が出てきたり、「コスモス戦争」など馴染みのない言葉が出てきたりして要点が把握しにくく、理解が追いつかなかった部分がある。

・講演を聞いた三名の講師はそれぞれ異なる立場からの話だったため、四十分という時間で理解するのは難しい。分散会では我々の立場として、どのようにアプローチすれば戦争を止められるかということについて話したい。

・鵜飼先生が学生に対して行った質問、「召集令状がきたら戦争に行くか。嫌なら反対運動をして批判するか」という二択に対し、自分なら戦争に行くほうを選ぶと思って聞いていた。理由は、その状況だと檀家も行ってるはずである。その人たちの供養や、無事帰還を祈るという立場からすれば、反対するとは言いづらい。

・自身の管区では、こういった戦争と平和の問題を教研会議で扱うことはほぼないと思われる。過疎地域の僧侶の関心は、寺院消滅という危機にどう立ち向かうべきかに持たれ、ここ数年続けて取り上げられている。戦争と平和について考えなければならないという気持ちがありつつも、能登の地震や過疎問題などに追われていたため、向き合う機会も少なかった。今回中央教研で取り扱ってくれたことは、学びを深めるいい機会であった。

概ね、以上のような感想が聞かれた。戦争に対し、報道等で知らされる知識はあっても、仏教者としてどのように考えるべきか。また日蓮宗の僧侶として檀信徒に問われたとき、何と答えるべきか。考えなければならない問題であると思いつつ、日々の法務や寺院運営に追われ、それが十分できていなかったという内省的な意見。共に、今回の講演を聞き、そのことについて深く考える契機となったという意見も見られた。

また一方で、日蓮宗の僧侶として、自分達が奉じる法華経・日蓮聖人の教えをどのように活かし、戦争に向き合うのか、あるいは止めるのかという内容には踏み込まれなかったため、それが残念であったという意見も見られた。

三、分散会討議（一日目）

はじめに座長より、今から約二十年前の、戦後六十年の節目の際、「日蓮宗から見た戦争と平和」というテーマで中央教研を開いたときの経験談が語られた。その際の分科会参加者は、戦前生まれと戦後生まれの世代がおり、戦争経験の有無からか歴史認識のズレがみられた。参加者からは、戦争のない平和な世界を築いていくためには、人類相

互の交流と対話が必要である。それには、宗教が国家によって精神的に動員されない法華経精神を確立することが大命題である。一方、他国から攻められた場合でも平和というだけで過ごすことができるのか、という反論もあり白熱した議論になった。というものであった。

続く討議では、宗教が理想を追い求めることにより生じる戦争。いわゆる宗教戦争であるが、宗教が争いを生むのであれば、それを奉じる宗教者はどうすればよいか。という問いを設け、参加者へ意見を募った。主な意見は次の通りである。

・日蓮宗僧侶として一天四海皆帰妙法を祈る中で、どういう立場をとるべきなのか。相手を負けさせるというような強行的な態度ではなく、法華経の良さを説き続けていくことも意義があるのでは。

・戦争は宗教が原因で起こるというよりも、領土問題などの外的因子から起こるのではないか。戦争をすることで利益を得る人達が、国民を納得させる材料として宗教を理由にしているだけではないか。キリスト教やイスラム教などは生活に密着している。よって宗教が戦争を起こすというより、大義名分として宗教が利用されているのでは。

・戦争、紛争、争いの原因に宗教が関わっているのであれば、衝突は避けられない。相手を負けさせてでも教えを広めるという宗教は果たしてどの程度あるのか。直接的な原因にはならなくても、宗教的に利益を得ようとしてきた部分もあるかもしれない。

概ね、以上のような意見が見られた。宗教が戦争を起こすというよりも、宗教が戦争という大義名分の隠れ蓑にされているのではないか。領土拡大などを目的とする侵略戦争では、戦争の正当化もできず気運も高まらない。宗教間の対立を旗に掲げているのではという意見も出た。

また、日蓮宗は一天四海皆帰妙法を志向する教団である。法華経・御題目を最上の教えとして信奉する自分達が他の宗教と対立し、仮にそれによって戦争などの争いが生じる場面であったらどのように対応すべきか。折伏的ではなく摂受的な立場から、相手の宗教も尊重した上で、法華経の優位性を説くことが正解なのか。またそれは祖意に適うことなのか。難しい問題である。

四、分散会討議（二日目）

二日目の分散会は、初日の講演と討議を踏まえつつ、あらためて参加者から戦争と平和に関する意見を募った。

・昨晩、同じ分散会参加者と食事に行った際、あらためてそのことについて話したが、宗教者としての考え方と、個人の考えを切り離して考えることは難しいという話になった。宗教者として考える前に、どうしても個人の考え方が出てきてしまう。それを抑えて宗教的な解答を出そうとすると、結果耳触りのいい解答しかできなくなる。中々本音で語りにくい問題ではある。

・宗教者が戦争に加担したことをネガティブな意味で話されていたが、果たしてそれは悪いことなのか。日本を守るためにやってきたことが、悪いことなのか。同じ宗教者という立場でも戦前、戦中、戦後ということで対応は変わってくる。皇道仏教などもそうであるが、いま振り返るとおかしな話として論じられることも、当時の状況からすれば仕方がないこともある。宗門や国を護る為に先師がやってきたことを尊重するという見方も必要であろう。

・鵜飼先生が学生を対象にとられたアンケートは、どういう状況下でとられたのか。日本人は周りの人に合わせる気質がある。コロナ禍においても、同調圧力によってマスクをしていた人も多い。アンケートも、個人が特定されない匿名性が保証された上でとったものか、あるいはその場で挙手させてとったものかということで答えは変わってくるのではないか。

・自身は最後の被爆地である長崎出身である。学生時代から八月九日の被爆地慰霊行脚を続けてきた。どうしても慰霊行脚というと、平和を構築するための前衛的なアクションではないようにとらわれがちだが、慰霊行脚の役割は、過去を振り返ることと、未来を紡いでいくことの二つの役割があると考えている。被爆地に近い檀家宅へ行くと、棟札のような大きな位牌を祀っている家庭が何件もある。表には複数の戒名が記されるが、裏を見ると全て命日が昭和二十年八月九日である。長崎では五十回忌を過ぎると弔い上げをする家庭が多いが、八十年近く経った今日でも供養を続けられている人もいる。また当時被爆された方の中でも、今も存命の方から当時の話を聴く機会も頂いている。長崎の行政などは、そういう声を集めデータ化するという作業が行っているが、そういう声を纏め未来へ残していくことも、いまの我々にできる活動なのではないか。

・原爆慰霊行脚に参加した際に、長年その行脚を担われている先輩僧侶に、「可哀想だった、残念だった、という気持ちと共に、有難うございますという気持ちをもって慰霊されていますか?」と問われた言葉が今も心に残っている。原爆で亡くなられた人たちが、はからずも身を呈して見せてくれた地獄絵図が、三発目の原爆を止めて下さったという見方。そういう意味では、その方たちは命を呈して今の私たちの平和を担保して下さっている。原爆で亡くなられた方が、今の平和の礎になって下さっていることに対して、感謝の気持ちをもつということも、宗教者として大事なのではないか。

また次いで、櫻井義秀特別研究員より、今回は「仏教から戦争と平和を考える」という開催趣旨のもと、三先生の講演を聞き議論したが、仮にもう一度このような戦争や平和などのテーマで行う場合、どのような立場からの話を聞きたいか、という問いがなされた。それに対する参加者の意見は次の通りである。

・いま宗門から我々僧侶におりてくる布教方針は「いのちに合掌」である。もっと明確な平和に対する思いが知りた

い。もう一度このテーマを扱うのであれば、基調講演に宗務総長を招いて、「いのちに合掌」というスローガンの裏にある、平和に対するこころの部分を聞いてみたい。

・「いのちに合掌」について宗門内で語れる人をイメージできない。仮に今後同じテーマを扱うのであれば、総長に限らずそのスローガンを語れる人を設定し、話を聞いてみたい。現場で困っている人は沢山いる。

・災害時のために平時のときに備えておく「防災」という考えがあるように、戦争に対しても「防戦」という考えがあってもよいのではないか。戦争にならないためにはどのようにすればいいのか。例えば、いま日本が戦争に直面するのであれば、考えられる理由は何なのか。エネルギー問題なのか、食糧問題なのか、領土問題なのか。戦争が起こる原因を考えて、それを防ぐにはどうすればいいのか。エネルギー問題であればその専門家を呼び、話を聞くことで、それをふまえていま私たちに何ができるかということを、より具体化して話ができるのでは。

・オンラインでも構わないので、ロシア・ウクライナの現地の人をお呼びして戦火におかれた人々のリアルな声を聞いてみたい。メディアを通した情報ではなく、生の声を聞くことで、より実感的な問題として論じられるのではないか。

五、まとめ

第四分散会の討議を振り返ると、戦争と平和、そして宗教戦争の是非にまで広がる重いテーマであったため、運営側としてはそれを掘り下げて討議することの難しさを再確認した。しかし同時に、宗教者として考えなければならない重要な課題であるということは、参加者全員が共有しており、そのことを中央教研で取り扱ったことに対する肯定的な意見も多く見られた。

また討議では、被爆地長崎からの参加者より、原爆の悲惨さと共に、亡くなられた物故者の思いを、未来の平和に

繋げていかなければならないという切実な思いが語られた。原爆で亡くなられた方が残された悲惨さがはからずも今の平和の礎となっている。そういう見方からすれば、我々は物故者に対し哀悼の念だけなく、感謝の気持ちをもって供養しなければならない。そういった平和に対する強い思いを、他の参加者と共有し討議できたことが、本分散会の特質であったように思われる。

第五分散会

座　長　河﨑俊宏
副座長　村上慧香
運　営　藤﨑善隆・原一彰
記　録　内藤善之
オブザーバー　古河良晧
参加者　十三名

一、運営について

第五分散会では、参加者に発言しやすい環境を作るために、三つのグループに分けて二日間の討議を進めた。参加者は、宗門の過去を深く振り返り、未来に向けて平和な社会の実現に向けて、具体的な行動指針を探求した。討議は二日間続けて同じグループで行われたが、一日目、二日目の終了時に各グループの代表が討議の流れと内容を発表した。また模造紙と付箋を予めグループ毎に用意した。参加者は発言内容を付箋に書き、模造紙に貼ることによって、議論の整理や発言内容の分類が容易となり、活発な意見交換の場となった。

二、資料提示と運営の説明

グループ討議前に運営側からいくつかの資料提示が行われた。

まず、最初に座長から宗門が取り組んできた平和への取り組みの歴史として昭和二十九年に端を発し、昭和三十五

年に至る宗門運動である世界立正平和運動の歴史的経緯とその趣旨について『立正安国論』、『曽谷殿御返事』、『一生成仏鈔』から紐解いて議題の問題意識の共有がなされた。

次いで、運営からは日蓮宗と戦争の関係について次のような経緯説明を行った。左記のとおりである。

・日蓮宗は、第二次世界大戦前後の時期、国家の方針に積極的に協力し、戦争を支持する立場を取っていた。

大正時代：天皇の即位を祝うために「蒙古調伏国体擁護本尊」を奉納し、国家神道との結びつきを深めた。

昭和初期：「国体明徴」の徹底化や「臨時報国義会」の設立など、国家の戦争遂行を支援する動きを活発化させた。

日中戦争・太平洋戦争：「立正報国」のスローガンのもと、戦争を「聖戦」と位置づけ、国民に戦争協力への理解を求めた。僧侶は兵士への慰問や、戦死者の弔いを積極的に行い、宗教団体として国策に協力した。

その流れを受けて、戦前、戦中と宗門が当時どの様な見解を持っていたのか宗門公式声明である諭達を昭和十年から二十二年まで振り返った。戦後については昭和二十四年の西川景文師の「先ず懺悔せよ」という檄文を参加者に提示した。宗報に掲載されたかの文章は往時における宗門の戦争責任に関する総括がなされたのではないかという見解に対して、一つの反証となる可能性を示唆している。僧侶は、単に集団としての責任だけでなく、個人のレベルで深く反省し、自らの行動を問い直しており、仏教的視点から罪の自覚と懺悔の重要性を強調している。その根底には戦争の悲惨さを痛感し、平和な社会の実現を願う師の気持ちが強く表れており、そのような時代背景の中で、一人の僧侶が自身の信仰と行動について深く反省し、その結果を率直に述べた文章である。

続いて、日蓮宗では明治時代以降、海外布教に力を入れており、特に、満州、台湾、中国大陸、韓国といった地域では、多くの布教活動が行われていた。当時の事情を鑑みて満州台湾を中心とした地域における戦時下の日蓮宗の海外布教を上海本圀寺別院の事例をもとに振り返った。日蓮宗は、海外布教に積極的に取り組んできたが、戦争や政治的な状況の変化によって、その活動は中断や縮小を余儀なくされた。この資料説明により、参加者に於いても海外布教の歴史は、日本の近代史や宗教史を理解する上で重要な一側面であり、同時に、現代における国際交流や宗教間の対話についても考える一つのきっかけとなった。

三、分散会討議

参加者は三つのグループに分かれ、宗門の戦中・戦後の歴史、特に戦争協力の事実や、戦後の宗門運動について討議が行われた。討議の主な意見と内容を挙げていく。

宗門の過去と反省

・宗門が戦争に協力した事実が改めて認識され、特に檀信徒への伝え方について深い議論が交わされた。祖父が戦争に参加していたという個人的な経験を持つ参加者からは、深い悩みが打ち明けられた。

・参加者全員が、宗門が過去の過ちを深く反省し、その責任を自覚することが重要であるという点で一致した。

・戦後八十年が経過した今、客観的な視点から歴史を検証し、教訓を学ぶことの重要性が強調された。当時の指導者たちのカリスマ性や、時代の背景を理解する必要性も指摘された。

・皇国仏教と日蓮宗の関係、そして当時の宗門の役割について、深い議論が交わされた。石原莞爾や当時の指導者たちの思想、そして宗門がなぜ戦争協力に走ったのかという根本的な問いが投げかけられた。

・戦前から戦後における宗門と戦争との関係は我々僧侶がきちんと学ぶべきであり、それが平和教育にも繋がっていく。それは檀信徒にも教化して伝えていかなければならない。

現代社会における平和への取り組み

・仏教徒として、戦争や紛争をどう捉え、平和な社会の実現に貢献できるのかという問いが投げかけられた。
・ウクライナやイスラエルの紛争など、現代の国際問題を宗教的な視点から捉え、議論が行われた。
・平和教育の必要性が強く訴えられ、僧侶の教育や宗門の研究機関の活性化が提言された。
・国際的な宗教団体との連携を強化し、平和活動に積極的に参加していくべきだという視点の元意見交換がなされた。
・現代において我々が同調圧力の強い日本に於いて共同体の中で孤立して檀信徒にそっぽを向かれてまで信念を保ち、通せるだろうか。戦前と同様に大きな流れには逆らえないのではないかといった疑問も吐露された。その点については自由に発言できる今の状況を守っていく事によって、いざというとき反対、反戦の発言、行動が出来るといった発言もあった。先師達が築き上げてきた日本の現状を今一度感謝して維持する。
・身近な所で出来る平和運動を考えていくべき。団扇太鼓を用いて檀信徒と共に平和行進にお会式の万灯行列を活かせないか。

宗門の未来

・法華経や日蓮聖人の教えに基づいた、現代社会に適応した平和論を構築する必要があるという意見が出された。
・平和運動の実践として、弔いや平和の祈りを捧げること、次世代への平和教育を行うことなどが提案された。
・宗門が国際的な宗教団体との連携を強化し、平和活動に積極的に参加していくべきだという見解が示された。

・宗門内に平和に関する専門部署を設けるなど、組織的な取り組みを強化すべき。

心の作用からみた戦争と平和

・重要なのは「内と外」の両輪で「内に向かう懺悔」と「外に向かう行動」の両輪を回すこと。
・内に向かう懺悔は過去の過ちを深く反省し、自分自身の心の浄化を図る。これは、新たな一歩を踏み出すための重要なステップである。
・外に向かう行動とは過去の過ちを繰り返さないために、具体的な行動を起こすことである。弔いや平和への祈り、そして、次世代への教育などが挙げられる。
・我々の反省を具体的に外に伝えていくのが仏教と平和なのでは。

今後の課題や展望

・平和活動に関する具体的な行動計画を策定し、実行に移していく必要がある。若年層を含む、より幅広い層の人々に平和の大切さを伝えるための取り組みが必要である。
・国際的な宗教団体との連携を強化し、グローバルな視点から平和活動に取り組んでいく必要がある。
・宗門の歴史を深く研究し、過去の過ちを正しく認識するための取り組みを推進する。
・僧侶の教育や、檀信徒向けの教育プログラムを充実させ、平和に特化した教育機関の創出を目指し、平和の大切さを伝えていく。
・国際的な宗教団体との交流を深め、共同で平和活動に取り組んでいく。
・地域社会への貢献活動を通じて、平和な社会の実現を目指す。

四、まとめ

今回の分散会では、宗門の過去と現在、そして未来について、深く議論が行われた。参加者たちは、宗門が過去の過ちから学び、平和な社会の実現に向けて積極的に貢献していくことの重要性を認識した。

グループ毎に宗門の過去と未来、特に戦争と平和に関する深い議論がなされており、大変素晴らしい討議の場となった。特に、討議の経過とともに参加者の個人的な体験や具体的な議論がなされるようになった。来年の戦後八十年の節目を迎えるにあたり、宗門は、未来に向けて平和な社会の実現に向けて努力していく必要がある。今回の分散会で得られた知見を活かし、宗門全体で平和活動に取り組んでいくことが求められている。

第六分散会

座　長　柴田章延
副座長　中井本蓉
運　営　都　泰雄
記　録　庵谷行遠・本間文裕
オブザーバー　中條曉仁・岡田文弘
参加者　十二名

一、運営について

一日目は戦争という姿の大枠を捉えて確認し、二日目は仏教的な平和とは何かということに焦点を当て、僧侶として何ができるのかということをテーマに討議した。

初めに、座長挨拶がなされた後、討議に入る前に、基調講演やパネルディスカッションの感想と共に、「他人から聞いたことがある戦争体験」も加えて、自己紹介をしてもらった。

二、分散会討議

他人から聞いたことがある戦争体験について

・終戦時に満州に居住していた方が、普段から現地の人に対し親切に交流していた為、他の地域では沢山の虐殺があったが、その方は現地の人に助けられた。

・東日本大震災の時、仙台の沿岸部の空が火災により、夜中であるのに昼間のように明るい現象を見たご老人が、戦時中の仙台空襲のことを思い出した、と言っていた。
・従軍看護師として戦争に参加した方が、戦時中の体験を世間話のような感覚で物語のように語っていた。
・戦時中近衛兵として出兵した方は、そのことを誇りに思っていた。
・通信兵で戦地にいた時、機銃の一斉掃射で隣にいた兵士が亡くなり、運で生き残った。
・大連から引き上げる時、大事なものを晒に巻いて、命がけで逃げてきた。
・片道の燃料しか積まず特攻に行く零戦を見送った。
・フィリピンで土豪に隠れている時、頭を挙げた瞬間に銃弾が肩を貫通した。数センチずれていたら死んでいたかも知れない。その時、隣にいた兵士が撃たれて亡くなった。
・子どもの頃、祖父に戦争の話を訪ねたが、一切語らなかった。とても子どもに語れる内容ではなかったのか、本人が話したくなかったのか今となっては分からない。
・大阪の空襲で町が焼け落ちて、普段見えるはずがない大阪湾が見えた。
・特攻隊に行った兄から弟に対し、「志願兵として戦地に行きなさい」と強要する手紙が届いた。戦時中は当たり前であった。
・詩集を出版した時、思想違反として特殊警察に追われた。
・父親が四歳の時、空襲で本堂が燃えている光景を見た。戦地から戻った叔父がＰＴＳＤを発症し、ショックから暴れてしまうようになった。
・高祖母は戦争が起こる事を憂い、詳しい理由は分からないが、灯油をかぶり焼身供養した。
・東京で空襲が終わると、帰り際に敵機が低空飛行で機銃掃射していくので、側溝に飛び込んで銃弾を逃れた。

・士官学校の教官が戦死し、その娘の面倒を教え子が代わりにみるという、映画の『永遠の０』の話のようなことがあった。

全体の戦争体験の話を通して感じられることは、死が身近にある時代であった為、隣人との絆が強かったのではないか、ということである。隣人と疎遠になりがちな現代の人にとっては、羨ましいことではないか。

また、自衛隊入隊経験のある参加者からは次のような話を聞くことができた。

・入隊直後にアメリカの同時多発テロが発生し、身近に戦争の恐怖を感じた。また現在でも、大砲などの訓練を行う前には、隊員が遺書を書く習慣がある。

自己紹介の最後に、座長と副座長からも、他人から聞いたことのある戦争体験として次のような話があった。

・広島県出身の座長が聞いた戦争体験では、広島の原爆投下時に爆発の光を見た瞬間に爆風に飛ばされて、辺り一面が砂煙で真っ暗になり、その後あちこちで火災が起こっていたので、消火に向かおうとした時、顔の皮膚が熱で溶けていた為に、「おまえ顔が無いぞ」と他人に言われた、というものがあった。

・副座長の祖父は通信兵であった。戦時中の一家の跡取りは優遇された為か、通信兵として、上空から戦闘を監視する役目であった。その他のことは語ろうとしなかった。もしかしたら、長男として優遇されたことに、引け目を感じていたのかも知れない。母方の祖父はシベリア抑留から戻り、手記を出版している。

戦争体験は、あまりに悲惨過ぎて、子どもに聞かせたくないという心遣いがあり、積極的に語ろうとしなければ、伝わりにくいという側面がある。総じて言えることは、戦後八十年近く経って、戦争の記憶が薄れていくということである。

【分散会討議（一日目）】

次に、池上萬奈先生の講演にあった、戦争は絶対悪ではないということを踏まえた上で、それでも戦争には反対であるという方の意見を聞いた。

・どんなことがあっても戦争は反対。世界から本当に戦争が無くなるかは分からないし、人は善悪一如である。しかし、仏教は人を殺めてはならないという立場にあるのだから、信じて祈ることの方が大事である。

次に、現在日本は、身近な所に戦争が起こる可能性があるが、何ができるのか、また何をやってはいけないのか討議した。

・先の戦争に踏み切ったのは、民衆が焚き付けたのかサムライの心で決断したのかは分からないが、僧侶は戦争が起きないように祈ることが仕事。

・争いは無くならないからこそ、僧侶が人々の考え方が正常になるようにローカルなメディアとして、檀信徒や世間に対して地道に伝えていくことが大切ではないか。我々は物事の優先順番を間違えてはいけない。

戦争の定義と昨今の国際情勢について

ここで座長より、戦争の定義や昨今の国際情勢について次のような説明があった。

《戦争の定義について》

戦争という形は、宣戦布告を国家元首が宣言した時が「戦争」であり、それ以外は「紛争」である。

戦争と紛争の間には高い壁があり、国家が宣戦布告するということは、国家の意思によって軍隊を動かすことであり、紛争の場合は偶発的に起こったものが徐々に大きくなり、最後まで宣戦布告を伴わずに終息するもののことであ

る。

単に人を殺してしまうという点では、双方とも変わらない。ただ、今回は「戦争」ということに焦点を当てて考えてもらいたい。

《戦争というガイドラインをしっかりと認識する》

現在ウクライナで起こっているのは「戦争」であり、プーチン大統領は「特別軍事作戦」と言って戦闘を行っているが、国際社会は宣戦布告と見なしている為、「クリミア戦争」と呼んでいる。

逆に、現在ガザ地区で起こっている戦闘は、「人質奪還作戦」から始まっているので「戦争」ではない。

池上先生の講演に対する質問の中にあった、

「イスラエルとウクライナで起こっていることに対する国際社会の反応が違うのは何故か。」

という質問に対して、ダブルスタンダードであると回答があった。

これは、宣戦布告を伴う国家の意思で国軍を動かした戦争と、人質を奪還する為に国軍を動かした紛争では、抑々スタートラインが違うということ。

国際社会では、ウクライナのブチャで起きた、約四〇〇人の市民の虐殺に対しては、ロシアに戦争犯罪を追求することができるが、イスラエルの爆撃により、沢山の市民が亡くなっていることに対しては、戦争犯罪が問えない状態にあり、「人道問題」ということでしか対処できない。

また、今年の長崎平和祈念式典において、市長がイスラエルの大使を招待しなかった為、各国の大使は式典に出席しなかった。代わりに東京の増上寺で行われた、長崎原爆殉難者追悼会に参加するなど、デリケートな対応をした。

《平和というものをどこまで訴えるのか》

平和には「積極的平和」と「消極的平和」というように二種類の側面がある。

「積極的平和」の例としては、ＯＤＡなどがある。発展途上国に資金を提供し開発を行う中で、資金を提供した国の企業が受注して現地のインフラを整え、政情や経済を安定させることにより、争いの火種を小さくし、回避することに繋がる外交政策である。

「消極的平和」とは、チベットやウイグル地区のようなところで起こっているような状況のことで、戦争は起きていないが、とても幸せとは言えない、人道的に大きな問題を抱えているという状況を指す。

《「消極的平和」は受け入れられるのか。それとも不干渉でいるべきなのか。》

座長の説明を受けて、参加者から次のような意見があった。

・紛争に巻き込まれない為にも、少し距離を置いた方が良いのではないか。バランスが難しい。

次に座長より、他国の争いの為に、米軍が日本の基地を利用することに対して、どう思うかという問いかけがあり、全体で討議した。

・既に利用している場所もあるので、全部を無くすことは難しい。利用している場所はそのままとするが、今後、日本は人口減少が起こる為、その時は隙を埋めてもらう必要はある。

・現在の日本では、個人の思想や意見に対して政府から弾圧されることがなく、中国や北朝鮮の国民のような環境にない為、正直分からない。仏教的・教義的な意味としての防衛という観点では、疑問に思う点がある。

オブザーバーより、ここまでの議論を踏まえて意見が述べられた。

《戦争を知らない私たちが戦争について学習することの重要性》

戦争体験がない人が戦争について話し合うということは、色々と誤解を生じることに繋がり兼ねない。広島の平和学習などと同等に戦争のことを勉強して取り組むべき。今回の中央教研がその勉強のきっかけになると感じている。また、平和を祈る事だけではなく、もっと社会に具体的なことを働きかけていく事が必要ではないか。

《防衛をどのように考えるか》

憲法で保障された自衛に関しては良いが、積極的な戦闘はすべきではない。しかし、武力によって占領されてしまった後、どのように対応するかは重要である。

占領軍も占領地域の民衆が従わなければ、占領政策も進まない為、ガンジーが行った無抵抗不服従運動のような武力に頼らない抵抗を行い、市民が組織連帯して占領軍の政策に従わないという、態度が必要になるのではないか。これは夢物語のように思われるが、実際にはチェコのビロード革命などの成功例もある。このような「平和的レジスタンス」に宗教者が力を発揮すべきではではないだろうか。

日蓮聖人だったらどうするのかを普段からよく考えている。

蒙古襲来時に幕府は真言の祈祷をする中、日蓮聖人は、蒙古軍によるある程度の蹂躙を覚悟されながら鎌倉を退き、戦争加担することなく身延に入られ、共同体を結成されたことは、政府とは別の立場にある組織として、平和的レジスタンスとしての立場を取ったと考えることができる。武力に対して平和的レジスタンスによって対抗する論理は日蓮聖人のものと重なる部分がある。

我々僧侶は日蓮聖人のこの覚悟の形態を考え、受け止めなくてはならないのではないか。

ただ、戦前の日蓮教学などを考えると、「平和的レジスタンス」という考え方は時代によっても大きく変わるのか

もしれない。

台湾有事などが起こった場合、日本は攻撃されるまで動けない。

鵜飼先生の質疑応答にあったように、現代の大学生に召集令状が届いた場合、一割は戦争に行かないが、九割は銃を持つという考えがあり、戦時中と変わらない状態である。日本人全体が危機に対する意識をベースアップしていくことが、一番防衛に繋がると考えることができる。

《平和的レジスタンスは可能か》

僧侶として「平和的レジスタンス」という意識は持つべきである。

ただし、日頃から周囲の人と信頼関係を築くことができなければ、非暴力を貫くことは出来ない。

ここで、参加者より、「ケーススタディとしての平和を議論するのではなく、我々、日蓮門下として目指す具体的な平和や、世界における立正安国浄仏国土が顕現する為に必要なものを議論し、現状を考えた方が良いのでは」という提案があり、立正安国顕現について討議した。

立正安国顕現とはどのような状態か

参加者より、次のような意見があった。

・戦争が起こっていないこと。

・既に立正安国は顕現しているが、我々が顕現していることを信じていないことが原因であり、ひとり一人の意識が大切。

・もし、占領された時に思想的な支えがあれば、翻弄されることはないのではないか。占領された側の思想的状態を海で喩えると、掴まることができる筏が浮いているのに、気付かず掴まることができない状態。筏という思想的な支えがあれば、皆が掴まることができる。前に進む為には、思想的な支えが必要となり、それを理解しなければ、希望すら持つことができない。宗教者は筏が存在することを人に示すことができなければならないと考える。

・「気付いていないことに気付く」ということがとても重要と感じる。立正安国や浄仏国土は存在していることを、僧侶が的確に答えることができないことに問題がある。我々は、もっと世の中のことを知らなければならない。

・宮沢賢治の「世界全体が幸福にならなければ、個人の幸福はあり得ない。」という言葉は、法華経の立場から唱えられたものであるが、世界では幸福とは言えない状況が数多くある。まだまだ努力しなくてはならない事は山積みである為、立正安国はまだ顕現していない。

・娑婆即寂光という仏の世界は、現実には実現していないので、それを努力し変えて実現するという考え方が必要ではないか。

・立正安国が顕現しているというより、顕現していくという目標と考えるべきではないか。

・勤務している寺院と自坊、それを取り巻く檀信徒だけの狭い世界で生活している為、世界や国のことには到底及ばない。身近な人から伝えることしかできない。テーマが壮大過ぎて、自分にはまだどうしていいか分からない。

ここで座長より、次のような説明があった。

戦前は寺院がスポークスマンとして、民衆を戦争に向けた経緯があり、「大東亜共栄圏」「五族協和」「八紘一宇」などのスローガンは日本政府および田中智学によって作成されたものであり、当時、日蓮宗も政府の方針に従っていた。日蓮宗は明治三十七年に、明治天皇の御心が心変わりし、ロシアとの戦争を開戦されるように、中山法華経寺、

池上本門寺、深川浄心寺に於いて、大祈祷会を厳修している。

僧侶でも一つ間違えば、このような戦争加担を招く可能性があるということを認識しなくてはならない。

私たちは戦争が起こらないように、その前段階において出来ることがある。また、宗教者として行ってはいけないことについて議論し、認識する必要がある。

さらに、参加者から次のような意見があった。

・大人になってしまうと、考え方を変えるのは難しいが、子どもに対する戦争の教育は大切である。

・子どもだけではなく、我々大人も戦争のことをもっと学ばなければならない。

・平和とは安心して生活できること。佐賀では現在、オスプレイの基地が建設されており、基地が出来ることにより、治安が悪くなるなど、住民の今までの平和な生活が脅かされるという理由により、基地建設に反対している。僧侶は、世間と個人双方に対するメディアとして発信する役目があり、どちらの安心を優先して動くべきなのか。

ここで、オブザーバーから次のような意見があった。

過疎の地域では、高齢者しかおらず、子どもは都会に出ているので地元のお寺には関心が無くなっている。過疎地の僧侶の方は都会に出ていった子どもたちと、積極的に関わってもらいたい。安心という心の持ち方が、キーワードになると感じている。

世界のことと身近な所の対極的な話があったが、身近な所から大局的な部分に繋げていくことはとても大切である。

【分散会二日目】

平和について

二日目は一日目の話をもとに、自分にとっての平和とは何かについて議論した。

・争いが無く、よく眠れ、安定した生活が送れること。安定した明日が来るという安心感があること。

・自分に近い自坊や檀信徒の周りは平和である。

・自分だけでなく、全く知らない他人も、当たり前に朝や夜が来るように安らかに過ごせること。

・「幸」という漢字は両手を手錠で繋がれた状態を指す。死を免れて手錠で済むことは幸せという意味に由来する。命があるだけで幸せなこと。現在の日本は、戦争の反省と憲法九条がある為、歴史的に見ても平和である。

・古事記の「高天原」や「天国」、仏教における「霊山浄土」「西方浄土」など「極楽」の様相は抽象的でふんわりとしているが、「地獄」の様相は具体的で細かい描写で描かれている。平和とは、心の安寧であり、僧侶が安心を与えることができること。

・カントの言葉に、「平和とは戦争と戦争の間のこと」とある。

・笑顔が見える時。自分の言いたいことが言えること。

・戦場に於いて、子どもが笑顔になる瞬間があり、その笑顔が恒久的に続くこと。

・平和とは、逆説的に「有り難う」や「感謝」がない世界である。「有り難くない」＝当たり前の世界。当たり前がある世界が平和。

・ＫＪ法の学習の時に、「かわいい」の写真を集めた。ハレ（晴れ）とケ（褻）という言葉があり、ハレ（晴れ）は冠婚葬祭や年中行事などの特別な日を指し、ケ（褻）はそれ以外の日常生活を指す。結果は日常生活のケ（褻）の中に「かわいい」が存在していたことに気付いた。たとえ搾取されていようとも、幸せを感じることができる人も

いる。「一水四見」の言葉があり、一口に水と言っても四通りの見え方があるように、日常の生活にこそ平和があるのではないか。

・仏教には因果の用語があり、疑うと疑われ、攻撃されると思えば攻撃されるように、他者を疑わないことを前提とする。国主が法華経を信仰して、他国と信頼関係を構築できれば、良好な外交関係を構築できる。仏教の幸福は表面に出づらく分かりにくい。

・平和とは点ではなく、線であると考える。そのレールに乗ろうとするかしないかという意志が大切である。人間は失敗や過ちを犯す為、その際に軌道修正をすればよい。常に軌道に乗っているか自問自答し、逸脱した際に軌道修正できるかどうかである。夫婦の幸せを例に挙げると、お互いに合意形成していくことであり、他人から見れば不幸に見えるかも知れないが、当人同士が合意していればそれで良いのと同じこと。国や世界に揉め事が起きた時に、いつか訪れる平和の姿の為に合意形成していくことが大切。映画「スターウォーズ」の中で共和国議会という組織が存在しており、互いの星や国の利益が関係するので、色々な合意形成をする為の組織である。その中に、平和と調和を司る「ジェダイの騎士」という団体が存在し、調停の為に互いの仲裁役として、対話や調和を整え合意形成していく役目を担っている。僧侶がジェダイの騎士のように、平和に向かって信じ突き進む役割を担うことができることが、理想となるのではないだろうか。

・宗門体制における三権とは別の諮問機関として、「勧学院」や「現宗研」が最高シンクタンクとして存在し、思想的一本の柱である必要がある。

・僧侶は常不軽菩薩の但行礼拝の実践が重要。パーソナルな部分から考えて世界へ広げていくことが大切。

ここで、赤堀正明現代宗教研究所所長より、次のような意見があった。

「立正安国」ということは、信仰の寸心を改めることと、国の安寧を願うということである。一念三千の「一念」と「三千」から考えるのである。日蓮聖人は、「国」という形のあるものと、「心」という形のないものの両面を考えられた。

また、「共業」と「不共業」という概念も重要である。人は平和を唱えながら、戦争するといった矛盾がある。身近な問題としては、ＬＧＢＴＱの問題があり、当事者は不共業を共業として受け入れて欲しい。社会的に表向きには受け入れられているように見えても、実際は不共業として扱う人が多いのではないか。例えばこのように表向きは仲良くするが、本音は利害損得で行動する為、そこで食料や資源の問題でも戦争は起こる。人類全体が戦争は無くなれば良いと思えば無くなるが、この両方を実現することがとても難しい為、戦争は無くならない。

もう一つ大切なことは、仏教の幸福感という問題がある。天台大師は蔵通別円の四種類の心の状態があり、幸福を感じるにも生滅・無生・無量・無作の四諦があると説かれている。これは幸福を求めるのではなく、苦悩が無くなった時に幸福が訪れるということである。

一方、キリスト教では、聖家族という素敵な家庭を築き、日曜日は教会に行く事が理想の幸福像とする為、目に見えて分かりやすい特徴がある。仏教の幸福感は表面に表れにくい為、分かりやすい幸福像を作っていくことが必要である。

仏教が世界に広がらない原因の一つは、表面に幸福を感じにくいことにあるのではないか。

さらにオブザーバーより、次のような意見があった。

議論の中にもあったように、不幸なことは挙げ易いが、幸福に関しては抽象的で挙げ辛い。不幸を強いられない当たり前の状態を平和ということに共感する。当たり前が続き、有り難みが少なくなると、簡単に平和が崩れる。修羅

道を顕現するのではなく、仏界を顕現することが大切であり、常不軽菩薩は、危機になったら一歩退いて、現実的な手段を取りながら但行礼拝した。

仏教的な平和や幸福について

次に座長より、一般的な平和ではなく、仏教的な平和とはどのようなことかという問いかけがあり、全体で討議した。

・画一的なものはないので、自ら作り上げていく。様々な価値観を互いに認め合いながら、合意形成を促す。合意形成できない人には繰り返し行っていくこと。

・相手のことを一〇〇％の共感（満足）をすることはできないが、七、八割で納得する。常不軽菩薩が他者に仏性を見出したように、価値観の異なる人の中に、理解し合える部分を見つけ出し、相手の仏性を見出すことが必要。その人の核になっている部分を認めてあげること。

・難に遭った時、業が解消されて敵を善知識と思えること。

・自分にとって不都合なことが起きた時、業を生まないようにする。

・原爆を投下された広島市民は、現在アメリカを憎んではいない。本当は許せないが、憎しみの連鎖を断ち切ることが必要。原爆を使用したらどうなるか、相手の立場に立って考えること。

・仏教の教えにより、値難した人々が、敵を敵と思うのではなく、善知識と思うこと。苦しみの捉え方を転じることができるのが、仏教の素晴らしさ。

・仏教の価値観が人の心に浸透すれば、物質主義や拝金主義の考えから離れることができ、平和を礎く為のブレーキとなることができる。

・仏教の幸福論は習俗に近いようなもの。自然で形が無く、無償で損得無しに相手にしてあげられること。
・先祖があって自分が存在しているように、今ある形に感謝できる心があること。
・全ての人が仏になる。自分の命も他者の命も尊いので、認め合うことが大切。価値観が異なるからこそ争いが起こる。異なる価値観を否定するのではなく、認め自覚する世の中を目指す。少数派の人が「私なんか」と否定してしまうことがない世界を築くこと。
・心の平和を考えた時、十界全てに仏界が存在するので、「どんな人にも仏性がある」「その人も仏である」と僧侶が自覚して自制し、人々の安寧に寄与すること。衣裏繋珠の喩えのように、気付いていない人に「あなたは元々宝の珠を持っているよ」と教える存在になる。
・他者との関わりの中で、自分の心の中の仏を見出していく。この関わりを広げると情報量が増加し、他者と比較するようになると幸福の実現が困難になる。課題は譲れないことがある時、どう対応するのか。自分の意見を主張し過ぎても、曲げ過ぎても合意形成は難しくなる。
・仏教的な平和や平穏とは、悩みや苦しみが無い涅槃の状態であり、自分の心が決めていくこと。開目抄にあるように、過去の事実は変えられないが、その経験から苦を楽に転じることは出来る。仏教的平和とは、心の外ではなく、内に求めるものであり、心の中にある平和を大切にすることにより、見える景色が変わる。
・教育が大切。寺院・僧侶はスピーカーの役目を持つ為、悪いスポークスマンにならないように気を付ける。懇切丁寧に教育し、物質的な物の見方ではなく、仏教の大切さを幼い子の心に残すことが平和に繋がる。
・最近は葬儀が簡略化され、儀式も形式化して意味も薄れている為、故人を送る意味を伝えることが必要になる。故人に手を合わせ、感謝することにより、自身の中に存在する仏に気付くこと。個と個が繋がっていくことによって、世界の平和が実現される。

・釈尊に矢が飛んできて当たり、その矢が花びらとなって散っている掛軸があるが、僧侶の役割は、どのようにすれば、矢を花びらに変えることができるか考えること。

三、まとめ

物質主義・拝金主義の平和と仏教的な平和には大きな違いがある。

一般的に経済が不安定な状態にあると戦争が起こりやすい為、物質的ではない価値観を、互いの核となる部分に見つけ合いながら、共鳴させることが大切なのではないだろうか。

我々僧侶は、互いの宗教や習俗が異なり理解し合えなくても、相手を深く理解しようとする努力を怠らないことが重要であり、表面的な物に捉われず、他宗教であっても相手の心の中に仏性があることを信じ、見つけていく努力が必要である。

また、間違った情報に流され、無知ゆえの憎しみを掻き立てるような宣伝をし、戦争加担してしまうような、悪いスポークスマンにならないことも重要であり、その為には僧侶が積極的に相手や他宗教のことを学ぶ努力が必要となる。

このように、僧侶がしなくてはならないこと、やってはいけないことをしっかりと把握し、太平洋戦争前に日蓮宗ができていなかったことを深く反省しなければならない。

我々は仏教的な平和の価値観を表明し、相手に共感してもらえる努力をすることが大切である。

今回の中央教研は、「仏教から戦争と平和を考える」という大きなテーマではあったが、我々僧侶が仏教的平和というイメージをしっかりと持ち、世界平和への道筋を示していくことが求められている。